函葉集

六

中村俊定文庫
文庫 18
713
6

宮城県図書館蔵

元禄六年百首

雪の朝に竹うゑ侍りしを

ちれやをとそんの梅はしらぬ　　路通

うち渡す外面の波のうへ　　宗波

鶴の羽　あらはれ　流れ　　友五

ちりしる　舟のあゆみにのこる月　　定治

大をたくことを　聞くあり　　盛水

　　嘗良

宮城県立図書館蔵

てらしとゝ[illegible]れ世の[illegible]て
旭さむひきゝ陳敷のを　水
[illegible]ふゝく人乃ゝ[illegible]　良
釈かゝゝ[illegible]れも[illegible]　道
世れ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　波
夢のあゝをあ[illegible]　丈
石之浦なれたゝを[illegible]枕　蓮
毋の[illegible]をかゝに[illegible]　水
春[illegible]白[illegible]の橋を居ゝ　丈
沼を[illegible]　砂川の虹　栄

よゝひゝ[illegible]かつゝ[illegible]　道
やゝれ[illegible]れ[illegible]ゝ[illegible]　丈
ゝ[illegible]れ[illegible]ゝ[illegible]　栄
絵　わゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　蓮
さんゝゝ姫の[illegible]ゝ[illegible]　水
いゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　道
解[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　丈
ゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]　水
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　良
わゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　栄

秋山下ある山伏の祈る夢　蕉
楚人もなく寺の秋の夕　又
うらさびれ行くの畑のうつゝ　迫
うゝをたに入るかゝれ家　蕉
文字ゝてハ学一枝の上　良
まれこゝひくあれいくゝ　迫
仲をうゝ世俗ゝ　又
る貴ゝ酒ひゝ　水
花小舟ひ男に名乗ゝん　策
乗うほうゝ　蕉

元禄七甲戌ゝ

物うゝの川とはゝる山路哉　芭蕉
とゝろゝ　雑子の鳴川　坡
京著語を書の長にとり　、
上の　たよりにある茶の香　菊
育のうゝゝとゝ月の雲　、
蕨うゝ　秋のさびゝ　坡

ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段

所所のつゝみを破て死の作
門て押る　壬生の宗紙
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段
ゆ段

[illegible]　苟
又ひとりも　宰　人　故
法華の法をとくれさう　苟
おいをたりうく青むきの米　故
とのおもてのまにまをあけ　、
魚よりひあく　たまの　穀炊　苟
ちうちう一番　[illegible]　故
赤をのるのこてあ　美角　苟
とうとうとたとえ嫁をつれてきて　故
屏風のけうこうある菓子　苟

[illegible]　小鉢のいりむこ侯漬　漬風
柳のひさかた　[illegible]　刈稼　大安成
[illegible]　切草の葛もく　治蓮
[illegible]の柄[illegible]　利牛
食物のたとえ[illegible]月　風
屋敷[illegible]　[illegible]の友達　蕙
小猪[illegible]　本猪の[illegible]　梔蹟
涉一文より下法をうるもの　牛

蕗蒻のしろもの是よりもめつらしく
祭乃すゑ傍ハ殿の　救護　蓮
ゆらたけものゝ子供ふらゝ　疱瘡　菖
ちよ　すゝしかふらゝ　鉄をつる　風
ちさまても　砂場をあらゝ　虎のる　牛
釜をやよて　沢ゝ　えひらゝ　隣
月氣の　紐も　ほとけ　蓮花　蓮
登人ゝる　蓮花　朝　母　蓮
当無の　作日の　ゝ花の　花　良
ゆふゝ　おひあひ　蓮ゝ川　紐　風

蓮花　羽日　ゆふゝ　竹　風子　浪化
孔　老ゝ　ゆふゝ　蓮の　ゝ作　去来
蓮入乃　ゆや　ゆ　合ゝ　ゝ
又　河の　ゝ　ゝ　ゝ　化
火　陸切　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　来

旅人小淵をかすめ四条辺
ひこの之ちき　六月のすゑ　化
しらくたる細を一えだ引ちら
小屋しなしなに埃のうす町　来
渭ふのちまへくとゑる京辺と
梅ちさう色くに出完くやしす　化
手中を私の内よと料理喰
作務の坊ひろうしき者　来
上弦乃本陣合羽と傘片く
海やのを通ひ八つ下なら　化

名月のをやうたひ居合　芭蕉
一歩てもかよ、梨よの切均
むかうれ作法小かる蛙の風　来
ふるれ寺を無理よ拝ふる
太のをれふひ法に浸なる
矣うしてやる　お役の文　化
此富をとゆくる能の報
青四う孫をて拝ふちの風　意
年月をる乃を世費辺所
給仕をちせくる土の食喰　来

月ゝ天の浮雲を見てゝ　来
雲と霞ゝ飛ゝよりてゝ　化
一の雪を踏ゝ初てゝ　〃
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　来
糸言といつゝ逢も　化
小川と名百ふむ　蓋
蓋ゝゝる松よりゝ花の咲ゝ　来
に乙人ゝ　化
新乙町ゝ供乃碧古紙　蓋
いつゝも　来

等や餅ゝ糞ゝ　極のと　芝成
日も笑ゝ　屋乃あゝ　支考
蕎入ゝたゝゝ入ゝ　〃
ゝゝゝゝゝゝ第ゝ　蓋
むゝゝ月ゝ　〃
風も　〃

歌の會すかるゝ阿れ仏もき　考
奏るれ同ゝも　侍　蓋
ゝゝゝゝとかゝるゝ抽をゝゝゝ
色ゝゝれハ　張　長　能　、
二ゝきたつのゝ宴のゝゝく　考
髪をゝゝゝて足歩るゝ　、
中変ハ仏殿つゝ堂の月　蓋
横識ゝゝゝ角カ丸の節　、
伝ハ乃田へ行やゝ原の明連て　考
和ゝのほゝゝゝゝゝゝゝ　、

仏殿して考傳ゝ命も京ゝ　能
白いてしに　ゝの乱入　、
かけゝゝの居千例ゝゝ　考
手我をゝつく人のゝをゝ　、
市張ゝ初れハ白のゝゝこゝ　能
重を歌して待をつゝく　、
雪風のゝんゝゝ頃　我ゝ　考
拾ゝゝあゝゝ　つ袁　能
頃ハゝのゝゝ初めゝ水桶　考
る　一ゝ可ゝゝゝ　、

小須市の何[illegible]人　苗
[illegible]　女房[illegible]　〃
むさ[illegible]月の入[illegible]　考
あの板[illegible]　〃
この丸の[illegible]風　苗
[illegible]の[illegible]　〃
[illegible]の食[illegible]　考
[illegible]　〃
民神の[illegible]　苗
[illegible]　〃

居士山田氏の[illegible]か
[illegible]

[illegible]　高成
苗の[illegible]　寿川
[illegible]風[illegible]　素流
進[illegible]　苗
さ[illegible]　川
[illegible]　流
耕[illegible]　苗
[illegible]腐[illegible]　川

鹿垣の縁より茄も盗やらる　浣

ゐのかりとゝつけにけり　翁

枕婦のゆらく花つむ櫂の音　川

葡萄ぬりあけく門にひろ島　浣

切麦てわらくうらく吹れあふ　翁

お梳の子のあたまに有月　川

うそさむき酒の釘に給はせ　浣

袖にうつれおとろの露のつゆ　翁

暖されにこ霧をかむきる人　川

折けるけするきんきえ鈿　浣

皆様ふ三ゑの古家こせとしの暮　去成

蕉作ふしふすゑ紀の名世　仙水

鋤黄儀の小くちときうかく　芦iz

むしろの地気におこれ鍬取　露仙

垢衆御形にき土る　峯の月　春渡

業ふをりく松の霧に横ふ　活逸

春垂れ方なるの星の菓ひろ　友五
立ちつゝひとる屋根のなハ湖　作作
こゝ陸を嘆てハ行かつゝ空　夕菓
ゆきて陸る　揺の船もろ　菊
菓ちの雫を陸士ち書　逸
いつ年に移ろ　唐　氏
朝月の松月　カ　る作の面　水
たちの作のせうきよもこ　波
作の月をこよろ　作の鏡　菊
ゆりひのちに八夏八ちちち　逸

華物のちちちれの板　五
一ちゆりゆゆゆの言　菓
姓ゆく　言のあるに舟書く　作
硯をほとく良のちさに　菊
髮赤れハ玉ちきひ下のる　波
茶をちちにちひちひさよ　菓
男ちゆ妹ゆれを　逸
なちちゆ横にちちと　菊
きゆれハ汁の年ゆの宵る　五
ちちちゆ作の和ちきちや　水

物の色に墨衣ふかくそめなすとて　西

ぬきすてる法へ　槍さきなり　民

甲斐信濃月を手に入り海　波

信濃なる千曲の月の秋錦　五

如仙さんの月を見ようとて　信道

さの月をうちに　ちらく来旦　嗜者

五猫ホ乃ち猫を使て　さを浪

子ねずみ月きめすりの月　此筋

槍ずいめるちの月　千川

仁と此なる月義　独空

舞入ふ業うりとこゝを芳て　香
意ー　古風のあるる　奥　筋　蕉
うつくしき書なて見やん　筋
形も　とうこゝろ術の　亀
世星ふ　おろこたる　布くゝ　蕉
解　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　月　の　香
ゝくと　ゝ　廣　布の　乃　川
一むれ　ゝ　る　乃の　筋
ゝゝ　ゝ　ほやゝる　亀
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉

猿猿やむけに　ゝ　ゝ　花の　奥　川
意　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　亀
世ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
彼　意　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　筋
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　香
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　川
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　亀
人　乃　情　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　筋
陀　袋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　亀

月乃言　葉を伝つたはるとも　蕉
相ふる　ふるの　こゝろを　香
夏人の　化ぬ先に　ふるたて　川
一ふく　信を　月を　入る　蕉
何たて　ものも　ひるみ　なり　魚
塩れ　ふるを　ふるこゝろ　川む　雪
あけの　月　我乃　ふたゝく　舞　筋
あるこゝろを　ふる　青　仰　魚
ふれ　ふり　静の　森を　ふみて　蕉
ふるすあるふ　中　立の　夢　香

牛流れ　村乃　ふるよや　三月　雨　汎竹
まるふ　ふる　切　梅　樫　のふれ　去来
一枝の　むり　ふ　屋　葉　押　合く　芭蕉
拍し　こ　ふも　ふよ　紙　ふ　惟然
月　ふ　ふ　苞　の　海　嵐　の　ふ　なり　丈艸
枕　ふて　ハ　四　の　中　の　ふ　ち　支考

[illegible]ことを聞きて　来

[illegible]八月十五夜あれ　竹

秋しやくとなるまき　拾ひ　然

[illegible]ことを　野明

抱込まれ川山もろきあるかな　考

あつかくまに魚たちさなり　蕉

雨もひのしまるに後もて　艸

紡ぎをそしに　根をこのさ　然

枝をくらいをたのしかを　竹

しまきいなる　[illegible]　来

[illegible]ときき　畠の　[illegible]　艸

ま夏を　紡ぎ　[illegible]　考

川舟乃ふこりに　[illegible]　明

[illegible]　[illegible]　然

[illegible]作の　[illegible]　考

[illegible]雨の　[illegible]　竹

[illegible]乃ふ　[illegible]　来

[illegible]　枝さ　高　蕉

[illegible]　[illegible]　然

[illegible]　[illegible]　明

朝の月紀く烟まとうく　竹
ゑ別なくに来るる　来
道とにわりろけ仏殿　蕉
かんをとゑる渋漬の桶　然
出来てゑる青の波音入く　明
なにをゑく等ゑうこの比　竹
吸ものて世変の色ハ古せゑる　来
紀後のお坊を又　まてこい　蕉
貴ちもを見人の連と後ゑく　然
白　ゑをゑゑく　まのる風　明

ゑうほの経机ゑ屋ゑう邪　文世代
せをく後ゑく　ゑの青空　奇香
初月乃ゑけ世藥ゑたゑく　尚白
石ゑりく　ゑ古ゑくゑう　自笑
松の木を秋風ゑそふ　更雪
おゑゑをやゑく　ゑの来ゑる　松岡

うつれる女子別るゝ日をつゝり　香
矣　数よ繞のよるべ悪こゝ　葵
古塚よ古びの文を持てかゝ　笑
持のとゝるゝ　香
るゝれる光とたゝく芭蕉　冥考
浮世の外のゝつとく寺　白
あゝ吹きゝ乃とゝる月二ツ　四
ゝをるゝよ笠の影　江山
稲つまに叫ゝ江を傳ひく　葵
よゝるれ乃のゝ離ゝ　笑

ゝをゝくゝよゝ中八月ゝゝ中ゝ　白
雨ゝ　紀名　冬のさゝい　香
夏仮ゝゝす和く友ゝん　雪
ゝれゝ高ゝ清の中とゝく　山
ゝゝ夫のゝゝゝゝる松の秋　考
ひゝゝゝゝゝ母のゝゝ　雨　宿江
乃ゝのゝゝて毛ゝゝゝの墓　一竜
ゝりれてゝゝれゝゝを持て　葵
仲の秋ゝ孫ゝ年を切せゝ　香
之法ゝゝく嶽ゝゝ形　香

うき人を養てハ和の家
大坂にてあるふたりれ女　白
一条や二条あるゝ小袖うち　考
物ゝ岩ゝ和えの山風　洞
うゝと雪にたるゝれく鄙の　白
香を荷ゝて海ゝ　江
碎ゝ伯父の新ゝ　雪
新の味ゝ　香
材ゝむつゝ物ゝを焚く　竜
ゝゝゆゝゝの和ゝ　蓋
　　白

ゝと物ゝ扇やゝの　ゝ世
ゝゝゆゝゝの新　安世
ゝゝゝ舟をゝ新ゝ　支考
ゝれてゝを　元芳
月のゝ竹の物ゝ中　古瓢
火ゝゝの火を拾ゝく　丹垂

うら咲をすゝめて鳴る秋の花　芳
気らよそる人のよ侘　孫
はつとりと袖を盛ろくてれを飲　世
宿の始るやうしむ海深　考
いふよにんを待るまうけして　桂
薪白の風りし息を吹るく　芽
銘紀るむすゝれ虎る給のよ　蒲
そろく江戸の学趴のくる　路通
まとらてひさとるえの思もさす　ヽ
ちつとのまに枝節しつてい

月をれを礼の家よかしこまり
あらゝ音沫や猫さかりけり
石塔を見まもて女郎ハとくめる
常丈仲する峠きつゝふ
小エ西多仲君かよりて知ヶ管
よめ強りしてるい煎ある
臨幣た粉をとたちて究ろおく
訓岐の所のちゝ渋さも虎る
明月の併にあてる冥東子桥
よしいゝ滴るわちもる

[illegible]ハ[illegible]ことに[illegible]
毎つくりてもうけハ[illegible]
女房にも笑ひ[illegible]て
[illegible]武士の二女[illegible]
[illegible]の[illegible]ハ杖より[illegible]
田の[illegible]ふ二[illegible]
牧の[illegible]ものて[illegible]
[illegible]と[illegible]
病め[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

友の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]と[illegible]の[illegible]
[illegible]ハいつ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

不成
曲翠
外言
怪然
支考
白

翠
言
延
考
為
翠
言
延
考
為

翠
言
延
考
為
翠
言
延
考
為

春ころもきせぬ琵琶の引ちらし　翠
葉くれのもと舟へおろしけり　良
對坐して文書写す月の庵　百
さびしさは上臈衆の上る也　考
李風つる旧巣の角の河原町　然
すゞめを招る　表一国　翠
その雪に綿を見かくる橋の上　良
大きれなめのとんま女夢出る　然
篁の竹で編むしよ々く　考
傘かけつらし桜の下　良

草のくれをとこぼれて鳥の鳴声　去来
坐松よせこの　なき声　夢　浪化
出荷物もらの人と咄しする　土芳
物ると　清浄のおみ　とさくれて　之道
まつ時ほと穂のくてはる月の入　丈草
ものほちくとりえく　ともを　支考

[illegible]　牧恕
[illegible]　堅壺
[illegible]　明
[illegible]　東
[illegible]　乙
[illegible]　芝
[illegible]　秀
[illegible]　然
[illegible]　壺
[illegible]　明

[illegible]　乙
[illegible]　東
[illegible]　芝
[illegible]　秀
[illegible]　然
[illegible]　壺
[illegible]　明
[illegible]　乙
[illegible]　東
[illegible]　芝

此夕　月を見たるとて出たるに
しつの屋の門　うるはしく
百畳つく作の座のたゝまと
まるとかゝる市の小女童
はるのたゝかはしつゝ
むこと留の　あるる接拔
世間の星下しはるゝ
ゆるる　笠よりうるはしく
笠の家の志ゝやまねはる
日々　一日　あるのさゝうり

考
然
童
明
考
考
然
明

柳　小折りうる花の姿　初夏楽　芭蕉
月引　折るる　ちゝ舟の緋　洒堂
むし　夜　星　とゝふ　出あり　去来
塀　うゝ　ひ　ゝ　ま　石垣　支考
月　折　氏　河　ゝ　む　舟の猪　丈艸
小鶯　花く　ゝ　ゝ　ゝ　素牛

[illegible]と海の藻屑となり
[illegible]を櫛に入るゝ如く
[illegible]も命をいつも乃とくまて
大工乃新宅を祝をする
竹植れ[illegible]る庫裏のそ
たくをなくゝ御利生を
降[illegible]雨のそゝと
如くゝ[illegible]に[illegible]
打鞭を焼と鞭と[illegible]
[illegible]の本れ表

蕉堂
蕉堂
来
考
牛
堂
卅
来
堂
牛

月花[illegible]小さ門をかけ入り
宗[illegible]兒乃[illegible]猿板
[illegible]
新[illegible]れ[illegible]
[illegible]乃[illegible]
迹を[illegible]
[illegible]雪れ一遍[illegible]
御前[illegible]人と次の田樂
迹込乃[illegible]を[illegible]
[illegible]れ明[illegible]

蕉堂
卅
蕉
堂
来
考
蕉
堂
牛

夢孔乃紅く紅くなる心坊　来
白拭　紅くて　ゆるく牛乳の　秀
川辺に流れて　きき　る　て　恵
岩のせる　甲乙丙　竜　州
正月　いかやれハ　海　昔也　壹
拾遺ふ　多れと　くれ　名代　来
咲乃紅の　うるる　ゆれ　逢銀　牛
彼岸を　うけて　お　ゆ　ゆく　州
行ふとも　行ふ　も　花　思い　秀
役ちゃれ　衣乃　恵　来

秋ちくさ　ちるれく　せや　ひるる　ます　ぐ也　成
ーーる　ふ　せれ　梅　れ　ひる　由　本節
月　る　秋　ふ　れ　大　敷　ず　ゆく　牡　恵
ゆ　ふ　れ　と　澤　ふ　乃　ー　ー　響　支　秀
ゆ　ま　る　ふ　れ　ー　れ　乃　ー　ま　節
乃　ひ　ふ　ふ　く　新　細　立　る　恵

夕食をすませて出張する船
行乃筆もしるしなき大きな
高くれば必乃うれ嘗味乃
うちくに登れて乃ふる事
佛壇乃傍に月の乃ぼる
樒ゝゝ乃れ蔵れあり風
八郎の孔をうこく傳乃
舟荷れ錆乃ぬけうつる
和尚法を地早に乃れ
お寺ゝゝする

醫者の子の考

考
然
蓋
節
然
考
蓋
節
然
蓋
考
然
節
考

弦ゝして細縄乃ゝれ垣
乃ぬ弦くほけ屋の内も
手所ゝちひさ乃やう仕ゝく
蓋乃乃ゝを立なゝ少
行燈のゝゝ乃ふ家つゝ
ゝふ長竜をとうりと金
半鄙ハ方に雨をゝやに
行乃根をり乃ゝの乃ゝ
ゝゝと京くの根和と家乃
嫁とむ乃先ゝ乃ゝをこく

節
考
蓋
節
然
蓋
考
然
節
考

客ハみれとくてこゝる大社よる　嵐
垂りすれおそりのさゝれや　節
髪結く禽さ手白払月夜　然
木に十ヶくり柿を貰也　嵐
満作よ中摘仕あけく喰ぬ　孝
とけも盥もあらしま編　然
投うちをそられて猫の逆おとき　節
肩りのをうつる掃除日　孝
花さけハ茶を携知れしの山　嵐
古草庵の秋れ　未つちみ嵜　然

蠅よしみとや卯秋の毛月ヶ　堅亭
菊のくし咲くるしの皺　之薮
小竹をさりし幾秋よ無情く　浮萍
狗しつ来る鱼のをしりこ　史邦
記と鳥りみられよ童る衣原ふ　丈草
たくをうしとせなりくしきる　亜

うちあけていとなれる人を呼ひ
自ら つゝひを出るはかりなり
掛子のうちなれるを見て
うゝうゝしくなる 元の小内氏
夕まくれなる家にて主人
ひとりうつれるもあの
石仏いつれ共あるうち
半の屋をみて牛仏とも
酒の徒うゝあるハ殺ふう
宝の八坊に多あり内

今ちのくハ新うう月の高くる
晒の美仏する こちのくひす
隠好の愛を片 るうまの
家ふちうにて 地ト ハ張うと
珍しくて 法 の 下すちを
片足つて 指に 水井の古学屋
唄 つくらうと 高 多
供多くつれ も加るの 新也
留の中にうい るいるつう

岩代井に然迷義氏名月和
歌可聲の尺こと氏 春 ケさ
やたらとたる手うつと 教へ会
みまの 和 面て 巻 ふさ
郭 て 三 く 呼 て 金 り 会
さうの 年 て おろ氏 を 稲
は 修 作 例 さ う 迷 さ び
食 色 ケ く く 義 ま の 上
仕 う は 氏 月 の 会 を 寸 れ
業 と つ む 髮 の ふ ま 呼

新 う え ハ 日 た と す ま ね 会 遅 て れ 山 右
ま ま お う や た う ま る う ま り 義 氏
る 何 の ま く た ひ ま 牧 の 和 に 、
に 会 ケ 乃 の ま ひ の た て 山 右
す く く 医 者 と し す る 業 の 月 、
さ と り の 作 法 ま れ も 会 ま を 前

魚の花のちるの夢路しく　翁
かゝる声にきくとや梅　店
夢路にはまとやめるとしても　翁
須の方きかめの中さし東京　店
丹波の宮の後もなくて別れは　翁
花季ゟ名れと利きく雲路　店
高く風しく大悲さのと退ちく　翁
抔し原中よ月八さんなる　店
神明の宮つりとしく　さゝら笑　翁
若草ゟ出く宿に帰るなる　店

奥の院おつくゑを皆し宴　翁
近野りて乱にく當のなく　店
春のよに表屋の仙の清ゝらと　、
かうりしや游湯くみしも　翁
いろうしゝ皆役意とようましひ　店
同つしもおりは霧ふるなり　翁
つひさる欅舟月日ゟ夕れく　店
かゝけの木地を包む糸たく　翁
とろしと紐挽むせはほとしまは　店
そろの字の花車る牀　極　翁

羽子の来る寺の坊おもひ　店
こつい付りつ鉢せゝりまふ　翁
銀を又ぬすまれしさきの月　店
留守におかれて山寺のくれ　翁
日記へたんりつけ秋の比　店
わかれしきのむ　牛のこ　翁
夕見る蒲生の家も敗れけり　、
あたにせとやとさする下司　店
されのうらは唯書をふみつゝく　、
老しれゝる　定家の卿　翁

あれして末は海に砕くる浪　猿雖
発のしらをあくる霧の梢　半残
飯月殺かゝる漸退ける　配刀
菜のなかり之暖簾の皺　望翠
うれさうと桐をわけ新酒紅　土芳
寂庵　さうにてそろ花なり　卓袋

紅葉の木の葉よりかくやなて　苔
名ぬしと地下と立ならぶ　歌
やき飯をうりてもゆのつあさ　賢
おもひたつさとをもぬくらう　芳
けるハ扇のうちの仕業　袋
朝水のぶりて月をえらぶ　苔蘚
紅葉の小屋の奉をぬくやや　刀
角力をまけてうるもの　歌
山ぶハ　山伏もの一うま　苔
袋うるる　形　のちの業　袋

禁中の家の屋の
ちうきさうに　ちの風俗
坪うちの川流の石橋上
ロうるる　風とう　会
大名の供のもさの果もの
石のかうの起る　血の
一代ハ代をおて来る流の和
たるの色ハ　袋うるる
炒米の革屋　細立の和尚て
いうちの奉の　柳うちの矢

苔　苔　賢　蘚　刀　歌　苔　袋　芳　刀

第六はまうねふたえて咲る也　弱
千うるはしの玉めける之ゝ月　朝
神立ハ供をおてある陶　翠
しゝく者よ　体む　武士　錦
永ちて藤するんしつ之　弱
加たゝ　そ　関　のおれと　芳
耳髓とそゝやに横之東　紫
彩雲のまゝき　六天　翠
大ふるはゝ引ある茶の羅　刀
采　のお物のたゝむ之月　藤

貞享四年卯之夏

卯ゝまゝ雲を西一うひゝ　妙行
うゝ晴る　ちゝれの雲　卯増
蓮ふきのうれ雲を掃きて　岡水
人のたゝハゝの枝うち　文成
宵ゝ　ち重のかん　主　桐葉
梯子のうけ　そよのる牧　東岳

拍子ハ律によるべきなり　工山
是ハ　いつも是風　桂樹
藤井の虎も居さしれ言てよ　紀節
そらしらとやうらかハの所　行
鶯の　四季とうれハ山ゆくさ　城
物てのはしの　のうけつ　水
義経を　中行とおりひろ　義
かくをは　文の　袖に　重
俳句の東ハ　序になりも　岩
一　ひきてなき　義経の表　山

教えれを　行をてくれも　山きはか　樹
ものを　うゝ　寺風の　さもきの　城
あるしの　所ハ　よくもつれ　面　行
後義経　る　樹のとろく　岩
樹をてハをと　後の行ぬ　重
水　人もをとを　ちをを　岩
既うあるひろ　ねもの　水
正すと　ものを　行
を稲の　所うゝ　後る　山
やうるしハ　はるも　を　重

みしてもふるさとを月わすれ　菊
ちこやつ　すこし　秋の水　梅
美そうるるのうつくしう　寄の中　塔
身なの枝をいいこいておく　水
おナうたうさかりのはきたる　墓
うゆをよまる　重綱の徒　菊
秋夜も来ゥするをれ　あ　ま　花
ぬ　ゆ　る　僧寺の小屋　山
伝説のそれを古歌戸の松葉を　行
郭　なりとおりくにあらく　梅

杉の露

色〳〵のさくもちるもの白露　叩端
杉のゆくすえを　芋屋の秋　相葉
まんるたに月のうけうえ　文政
ちらの　よきは人のうりをを　楽房
芋ちる　芋ひも　絵を　ちりハ　工山
あけ　坊　ゆ　の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　岡水

牧童

けわしう何をたづねんとは信長せんきしうとわしうしく竹藪村うつぶしに見るおもしろしつむうしの姿おもしんしとの安作を指おもしろしとのしろうしく

端　蓋　菊　秋　山　水　蓋　菊　秋

りしたちをのこは義伐　やまを色ふかしの　畑てをたづる　月　のをしくを

端　蓋　菊　秋　山　水　蓋　菊　秋

きしと月のさめぬ　屑のしらしき

敷もきたる猪横にちらばる

死　月　てふの　家しくなる

きしくと動ぬ　人の　家　みて

破て　又　孫る　けしきしの上

夕　れ　ハ　窟もきうの　蓮　池

月　水　しる　家のちとる

迷うる　市場のるをうたる花

ぎよこれ　義おろしり

為くるを　ちくよこたう

如しとの月とちまる花

端　蓋　菊　秋　山　水　蓋

雪の日や碇おろさぬ引しほる　水

咲そく碧の色まてかろく　布

砂川を突よこちしも定かりさ　鵠

鳥る牛を掩もつらり　山

奥ふ家るゝも降れハちゝい絵　蒸

り灯の此の細き冊子　鵠

香るると足ハ宗旨風まなり　布

草一ぜ有とれの一時　苺

従かしる梶海洞のかつりしま　山

茶有酒小光永のおくら　菓

涼しくとくくきりさ板実弘　即宴

竹乃たわれを紬かしかく　帆然

朝月小鶴市ある尾をふりく　古芳

すれ之すゑ日と豆腐煮れ切　雪芝

大八乃ちょ往来つゝ捷小路　猿雖

師もれ兵ありあくら佐も忌　去紙

痩たる水仙白く川ありて　卓袋
呼中の斗を隠たきやる　九節
娵入乃来て振ふ門まもり　芝
扶や笠とを龍みて出　望
一こゝ留なしき立る月雅飢　然
雛鶏なり　穗くれ浦　飯
大名のもとりて四方も細ふを　悳
蕎麦粉を震ふ惜子れ様　袋
立寄る文書く延見せ乃猶　飯
豁りい千々く姐母の涙て　悳

御んまるたゝ花乃木陰の一ゑ之人　芳
とらやはきさ　水乃ちりる風　飯
旅籠屋ホ雲雀に啼て出る蕪　芝
ほしれ乃さとく　まよと尋ね縮　袋
冬枯の九尺母なしむ霧雨波　悳
たゆくすれハ飛風もれ漏　芝
指抜れ一間席へもゆるゝを　望
あはき流く八皆つかさとし　芳
宵乃うち入ふさ仕舞ゐて帝　節
草の花しられぬきさ小事様　然

百のあれはうすくもる張の振袖　朝
ちふとしの雪　逢坂の杉　意
明るうなりて　つるくもる　寂
雲のしたくれなゐ頭痛やうすく　紅
うすくて　雪にて　金蔵の門　芳
ちりそめたるうすくもる　芝
ちりくとき世にて　貝の売　朝
いろいろあれ　ちりくと　紅風
ちりくと　花の咲　大きな　菜
柳にまつる　古の　ものの　俊